

法学部

橋元 志保先生推薦

『ギリシア人の物語〈3〉新しき力』

塩野 七生著
(講談社)

塩野七生によると『ギリシア人の物語Ⅲ 新しき力』は、彼女の最後の歴史長編であるという。その理由として「地中海が歴史の主役であった時代はすべて書き終わったから」とも述べている。塩野七生の代表作といえばやはり『ローマ人の物語』全15巻であろう。しかし、『コンスタンティノープルの陥落』や『レバントの海戦』、そして『海の都の物語 ヴェネツィア共和国の一千年』を印象深い作品として挙げる人も多いかもしれない。海洋国家であったヴェネツィアにおいて復活祭に行われる「海との結婚」という有名な行事や、その主役となるアドリア海の美しさ、そして華麗なサン・マルコ寺院も、教科書や歴史書ではなく塩野七生の著作から私は知った。極上の歴史エッセイともいうべき同氏の作品は、常に読者を歴史的な空間へと引きこみ、様々な出来事の中に立ち会わされているようなリアリティを持って、私たちに迫ってくるのである。

『ギリシア人の物語Ⅲ 新しき力』も、まさしくそのような作品であり、内容は大きく二つに分かれている。一つ目はアテネをはじめとする都市国家の没落であり、二つ目はそれに対するマケドニアの台頭と、アレクサンドロス大王の生涯である。表題の「新しき力」とはもちろんアレクサンドロスを指すが、世界で初めて、ギリシアからペルシア、エジプト、メソポタミア、そして中央アジアへと広がる大帝國を築きながら、32年の短い生涯を駆け抜けた彼の魅力を、精緻な調査に基づき大胆かつ繊細に語っている。アレクサンドロス大王のカリスマ性や強靭さだけでなく、兵士たちや「心の友」との強い絆、その情愛の深さ等も語られ、多面的な彼の魅力を余すところなく伝えている。ぜひ一読してほしい、素晴らしい歴史エッセイである。